

高橋 慎一

●タイトル:「酢豚」

●登場人物

出演……母、カズ（息子）

●ストーリー

SE 人で賑わう大通り。

カズ 「母さん、今日の夕飯ってなに？」

母 「えっと、酢豚がいいかな〜。なんだかさっぱりしたモノが食べたいのよ。カズくんはそれでいいかしら？」

カズ 「なんだか、妊婦さんみたいな台詞だな」

母 「んもう、カズくんのいけずう！ いいでしょ、わたしは酢豚が食べたいの！」

カズ 「へいへい。わかったから、ブーブー言うなよ」

母 「ブーブーなんていってないよ？」

カズ 「……気づいてない……。ま、いいや。じゃ、早く買い物済ませようぜ」

母 「わ〜い。カズくんの手料理だ〜☆」

カズ 「オレが作るんかい！」

母 「そうよ〜。だって、カズくんの方がお料理上手だし、器用じゃないの〜」

カズ 「右手で包丁を持っておきながら、右の親指を切る母さんには負けるがな」

母 「いや〜、照れますなあ」

カズ 「褒めてないから！ イヤミだから！ って、なんで得意満面なんだよ。いや、いいから。笑顔こっちに向けなくていいから！」

母 「遠慮しなくていいのに〜」

カズ 「してません！」

母 「即答……くすん」

カズ 「嘘泣きもけっこう！ 疲れるから！ それより酢豚だよ。オレ腹減った」

母 「ちえ〜。カズくんが冷たい」

カズ 「まともに受けてると疲れるからな」

母 「そうなの？ 大変ね〜」

カズ 「そうなの。大変だよ〜。やっと着いたか」

SE 自動ドアの開く音

母 「スーパーの中涼しい。……さてと、酢豚っていうぐらいだから豚肉、よね？」

カズ 「そりゃそう……知らずに決めたの？」

母 「うん、テレビでね。美味しそうに酢豚を食べてるのを見たら食べたくなったの」

カズ 「母さんて、影響されやすいからな〜」

母 「まあね。ところで、豚肉って言っても種類がいっぱいあるわよ？」

カズ 「バラだよバラ」

母 「んもう、カズくんたら。ココはお肉コーナーよ？」

カズ 「は？」

母 「だ・か・ら。お花が欲しいなら、お花屋さんに行かないと」
カズ 「薔薇じゃねえよ！ バラ肉だよ、豚バラッ！」
母 「……や、やあね。わかってるわよ、そんな事。今のは冗談よ冗談」
SE パシン、と背中を叩く乾いた音。
カズ 「イテッ！ あああもう、ふざけてないで次。行こうぜ」
母 「ああ、カズくん待って！ 置いていかないで～」
SE 足音（早足）
カズ 「えっと、野菜はコーナーは……」
母 「無視しないで～」
カズ 「ん、あったあった」
母 「ああ、ひどいわ。息子がわたしを虐待する～。しくしく」
カズ 「してねえよ。てか、人聞きの悪い言葉は止めて下さい！」
母 「それで、お野菜は何使うの？」
カズ 「(小声で) 聞いてねえ。一体どっちがヒドイんだよ？ ま、今さらですがね (気を取り直して) 何って……ニンジンにタマネギ。それから……」
母 「ジャガイモ」
カズ 「そそ、ジャガイモ……って、それじゃカレーになっちゃうだろが！
そもそも中華料理にジャガイモって聞いた事ないぞ？」
母 「そうなの？」
カズ 「そうなの！ たぶんだけど、な」
母 「じゃあ、他に何入れるの？」
カズ 「思い出してたのに、母さんが邪魔したんだろ？」
母 「あれ～、そうだっけ～？」
カズ 「そうなんです！ もう何なの、この母親？ 最悪なんですけど？」
母 「ま！ 実の母を捕まえておいて何て事言うの、この子は！
母さん許しませんよ……！」
二人 『お父さんに言いつけてやるんだから』
カズ 「だろ？」
母 「まあ、息ピッタリ！ さすが実の親子ね。愛のなせるワザだわ！ うるうる」
カズ 「うぜえ！ 自分でうるうる言うな！
てか、いっつも言ってるじゃん。そりゃ、嫌でもタイミングも覚えるっての」
母 「それだけ一緒にいるって事よね☆」
カズ 「ああ、もう～。何て言えば理解してもらえるんだよ～」
SE お腹の鳴る音
カズ 「やべ。マジ腹減った」
母 「ほらほら、急いで買い物済まそう！」
カズ 「っくう～……」
カズ 「(小声で) こらえろ。こらえるんだオレ！」
カズ 「そ、そうだな。え～、あとはシイタケにピーマン」
母 「ふむふむ。あとは？ まだ何かあったよね？」

カズ 「えっと、なんだっけ？」
母 「なんか、最後に“ノコ“が付いたよね？」
カズ 「コ？ キノコ……ってシイタケがもうあるか」
母 「カズノコとかは？」
カズ 「正月でもないのに売ってないだろ。てか、酢豚に合わないだろ」
母 「そうねえ。独特な味だものねえ。けど、母さん好きよ？」
カズ 「母さんの好みは関係ないだろ。酢豚にさ」
母 「えっと、じゃあ……蜂の子？」
カズ 「げ。やめてくれよ」
母 「う～ん。スノコに鉄ノコ……は食べられないし～」
カズ 「そ、そうだな」
母 「わかった！ ツチノコよ！ これで決まり、ね？」
カズ 「幻の生物を何で食べなきゃいけないんだよ。ノコにこだわり過ぎだろ」
母 「ん～、いい線いってると思ったんだけどな」
カズ 「いや、全然違うだろ」
母 「あ、タケノコよ。タケノコ！」
カズ 「まだ言うか！ それは違……くない。てか、それだ」
母 「テレビでやってたのを思い出したのよ。水煮が便利だって言ってたかしら」
カズ 「くっそう。母さんに負けた。なんてこった！」
母 「ふふん。たまにはいいトコロ見せないとね？」
カズ 「ぐあああ、むうかあつうく～」
母 「なによ。失礼しちゃうわねえ」
カズ 「だってさあ～」
SE お腹の鳴る音
母 「ねえカズく～ん。お腹すいた～」
カズ 「む。やはり母さんは母さんだな。しかし、この屈辱をオレは忘れない！」
母 「ねえ、は～や～く～」
カズ 「ええい、袖を引っ張るな！ 伸びる！」
母 「お腹すいたお腹すいたお腹すいたお腹すいたお腹すいたお腹すいたお腹すいた
お腹すいたお腹すいたお腹すいた～～～っ！！！！」
カズ 「わかった……わかったから……。だから、耳元で大声出さない、で……」
母 「はあ、大声出したら余計にお腹すいたあ」
カズ 「だったら、出すなよ」
母 「ん？ あ、カズくん！ タケノコの水煮あったよ～」
カズ 「へえへえ。そりゃ、ようございました」
カズM 「またスルーかよ？ 突っ込んでも意味ないんだよな～」
母 「元気ないね、カズくん。休むなら酢豚作ってからにしてね？」
カズ 「あんた鬼かつ！ は！ また突っ込んでしまった」
SE チャイムが店内に流れる
母 「ハッ！ このチャイムは！」

カズ 「どしたの、母さん？」
母 「ごめんね、カズくん。母さんこれから行かなきゃいけないの」
カズ 「は？ どこに？ 何をしに？」
母 「大丈夫よ。必ず……必ず迎えにくるから……ごめんねえ」
カズ 「おい、聞いているか～？」
母 「早く行かないとお惣菜が終わっちゃうのよう～……！」
カズ 「惣菜？ さっきのチャイムでそこまでわかるのか？」
SE 足音とは思えない凄まじい足音
カズ 「な、なにになになに～？ みんなタイムサービスに殺到してるのか？
か、母さん大丈夫かな……」
間 3秒
母 「お待たせ～！ 見て見て～。一番おっきいやつ、ゲットしたわよ！」
カズM 「はあ、よかった～」
母 「ん？ どしたの？」
カズ 「いんや、なんでもないよ。気にせんでくれ。で、何をゲットしたのさ？」
母 「ん？ 知らない」
カズ 「中身くらい確認しとけよ……」
母 「まあまあ。食べ物よ、きっと」
カズ 「食べ物じゃなかったら逆に何なのさ！」
SE 湯気が上がる音？
カズ 「ここで開けるなよ……ん？ この匂いって、まさか……」
母 「わあ、美味しそうな酢豚～」
カズ 「おい！ いい加減にきなさい！」

(完)